

ちょっと気になる 香りのはなし②

洗剤・柔軟剤に、制汗剤、整髪料。電車のなかで、
こどものお友だちから、隣のベランダから……。

NPO 法人市民科学研究室代表 上田 昌文

柔軟剤や抗菌剤を使うリスク

“ふんわり”するのは、なぜ？

「香りの害」で問題になるのは主として柔軟剤と抗菌剤です。

柔軟剤は十数年前までは、部屋干しのおいや汗のにおいなどを抑えるために、微かに香る程度におさえられていた製品が大半でしたが、香りの強い「ダウニー」（二〇〇八年、米国P&G）や「レノアハビネス アロマジュエル」（二〇一二年、P&Gジャパン）がブームとなったのを機に、現在は、より強く香り、かつそのにおいが持続するよう工夫した商品が多数出まわることになりました。

柔軟剤はそれがもたらすフワフワの感触とよい香りのイメージがあるためか、その危険性が見過ごされがちです。

洗剤には陰イオン界面活性剤（その分子が、水になじむ「親水基」の部分と水をはじいて油になじむ「疎水基（親油基）」の部分とで二極化していて、マイナスの電気を帯びている）がもちいられています。

衣服につく汚れの大半は、水だけでは落とせない皮脂などの油污れなので、これに陰イオン界面活性剤を加えると、その疎水基の部分が繊維や汚れに吸着して取り囲みます。そうすると、その汚れの粒の外側は親水基で覆われることになるので、それがまわりの水にひき寄せられて衣類から剥がれます。こうして洗剤は汚れとともに洗い流され

ます。

ただ、洗剤で繊維を洗うとマイナスの静電気を帯びてゴワゴワの質感になるため、柔軟剤（洗剤と逆に、プラスの電気を帯びている陽イオン界面活性剤）でプラスの電気をあたえて中和することでふんわり感を出すわけですが、この効果は、柔軟剤が繊維の表面に吸着して離れない性質を利用して、最終すぎの段階で使うことで得ているのです。

免疫力の低下につながるおそれ

つまり、柔軟剤を使うことは、わざわざ「洗剤の仲間（界面活性剤）」を衣類に残留させてそれを肌に触れさせる機会をつくっていることになり、塩化アルキルトリメチルアンモニウム、塩化ジアルキルメチルアンモニウムなどの「第四級アンモニウム塩」は

（１）陰イオン界面活性剤よりも強い**毒性や刺激性**をもつ（アレルギーの誘発や高濃度の曝露では胃腸炎、吐き気、嘔吐、昏睡、痙攣、低血圧などを引き起こすことがある）。そのために抗菌剤にももちいられる。

（２）衣類についてその外側に「疎水基」が並ぶため、**吸水性を悪くする**（その衣類を着て汗をかくと蒸れやすくなる）。

ことがわかっていきます。

だとすれば、たとえばタオルや下着に柔軟剤を使うと、肌荒れやアトピーの悪化の恐れが出てく

ることは容易に理解できるでしょう。

ましてやこのような成分を抗菌剤として、頻繁に空中に噴霧し、衣類や家具に吹きかけるとしたら……でも実際、たとえばTVのCMでも盛んに「10秒で空気を掃除」するシーンを流している「フアブリーズ」がまさにそれです。

柔軟剤と消臭など謳った抗菌剤は、柔らかな感触や「菌＝悪者」のイメージに頼った清潔感をウリにしていますが、常用することで、皮膚ひとつとっても、そこに数多く存在する有用な常在菌にダメージをあたえ、ひいては私たちの免疫力を低下させることになるのではないかと私は恐れています。

柔軟剤や抗菌剤の香りづけは、まわりの人々に対して化学物質過敏症を患うことのリスクを高め、その製剤をもちいることで自身も種々の健康リスクにさらされているにもかかわらず、まるでそんなことが起こらないかのようなイメージを演出しています。イメージに騙されず、きっぱりと縁を切ることから始めなければなりません。



うえだ ちかふみ
大阪府生まれ。NPO法人市民科学研究室代表。「市民のための科学」の視点から、電磁波、放射線等さまざまな領域での研究を進める。著書に『原子力と原発さほんのき』（クレヨンハウス）など。